

【曲目解説】

「西洋絵画、どこから見るか？」展 記念コンサート vol.2

文・佐藤亜紀子

「西洋絵画、どこから見るか？」展の副題「ルネサンスから印象派まで」は幅広い時代を網羅していますが、私たちはルネサンス時代 16 世紀のスペイン音楽に焦点を絞りました。

中世からイベリア半島ではイスラム勢力を排除し、キリスト教徒の国を作る「レコンキスタ（国土回復運動）」が行なわれ、1492 年イスラム教徒の最後の都グラナダが陥落し、スペイン王国は勢力をさらに増やします。イスラム教徒はすぐに排除されたわけではなく、「モリスコ」と呼ばれ、キリスト教に改宗させられながらも住み続けていました。

イスラム教徒との戦闘、キリスト教徒との禁じられた恋などが、ロマンセ（物語詩）の文学作品となり、歌われました。スペインルネサンス音楽には、同時代のイタリアやフランスの音楽とは一味違ったエキゾチックな魅力があります。「3 人のモーロ娘は私をとりこにした」、「ムーア人はアンテケラを出た」、「ムーアの王は散策していた」、「聖ヨハネの朝」、「燃えよ、心よ、燃えよ」などはその良い例と言えるでしょう。

「言っておくれ、悲しい心よ」は、15 世紀に活躍したセビリア出身のトーレの作品。カトリック両王（イサベル1世、フェルナンド2世）の時代には「王宮の歌曲集」という 548 曲もの世俗歌曲の曲集が、1470 年代半ばから 40 年の月日をかけて編纂されますが、その曲集より「3 人のモーロ娘は私をとりこにした」、「もしやこれらの皮袋の中にあるのだろうか」、「今日は食べて飲もう」、「ロドリゴ・マルティネス」を演奏します。声楽曲ですが、器楽も加え、宮廷の楽しい宴の雰囲気をお届けします。

スペインにはアラブ起源の楽器であるリュートは存在せず、その代わりギターの形に似た楽器が演奏されました。ルネサンス・ギターは気軽に引き鳴らしながら伴奏ができる楽器として親しまれた一方、ビウエラはより複雑な対位法的音楽を奏でられる高貴な楽器でした。

「千々の悲しみに基づくディファレンシア、皇帝の歌」は、ビウエラ・レパートリーの中でも人気のある曲です。神聖ローマ帝国の皇帝カール 5 世は、1516 年にカルロス 1 世としてスペイン王に即位しますが、母国で慣れ親しんでいたジョスカン・デ・プレの「千々の悲しみ」が好きだったのでしょう。ビウエラの名手ナルバエスがビウエラの変奏曲にアレンジし、「皇帝の歌」と別名をつけています。

宮廷作法についての本を書いたビウエラ名手ミランの優雅な「ファンタジア第 8 番」、そして物悲しい当時の流行歌「何で洗いましょう」は、16 世紀スペインの人々の暮らしぶりや感情が伝わってくるようです。